

さあ、私が今あなたにしてほしいことを記そう。礼拝に集まった時には、各々、全ての
人にとって役立つものを準備しなさい。つまり、詩編を歌うこと、教えを説くこと、物語
を宣べ伝えること、祈りを導くこと、洞察力を養うことを、それぞれ備えて集まることに
しなさい。

——コリントの信徒への手紙（一） 14章26節

マルコが伝えた「良い知らせ」

——マルコ伝福音書 訳述——

川上直哉

神様の わが子と慈しみなされる 尊き方、
私たちを助ける人 イエスと呼ばれたキリストの、
その「良い知らせ」の そのものの物語。

イエス様は山に登り、ご自分が「これ」とお思いになった人だけをお呼びに
なりました。その人たちがやって来ると、イエス様は 12 人を特別に選び、自
分のそばにいつもいるように言いました。そして、大切な「よい知らせ」を宣
言して回るために、また、憑物を落とすために、この 12 人を派遣することに
なさいました。この 12 人こそ、後に「使徒」と呼ばれるようになった人々な
のです。その 12 人の幾人かを紹介しましょう。まず、シモン。イエス様は彼
を「岩男（ペテロ）」と呼んでいました。それから、ゼベダイの子どもたちで
ヤコブとヨハネの兄弟。この人たちは「雷兄弟（ボアネルゲス）」とイエス様
から呼ばれていました。それから、アンデレ、フィリッポ、バルトロマイ（ト
ロマイの子）、マタイ、トマス、タダイオス、「カナイン（過激派）」のシモン、
カリオテ村のユダ——このユダは、イエスを売り渡した人物となるのですが——
。この名前からわかる通り、みんな、ギリシア系の名前です。つまりイエス
様は、ギリシア・ローマ世界で植民地化された地域の「名もなき人」を選ばれ
たのです。

* * *

さて、イエス様がある家に入られた時のことです。やはり、大勢の人がそこに押しかけてきました。それで、ご飯を食べることもできません。そこに、イエス様の身内の人たちがやってきました。「イエスはおかしくなった」ということで、取り押さえに来たのです。

そういえば、えらい先生方も首都エルサレムからわざわざやってきて、イエス様について、こんなことを言っていました。「あれは、あの恐ろしいベルゼブルがとり憑いているのです」「あれは、憑き物の頭目の力で、憑き物を落としているのです」。それで、イエス様はその人たちをお呼びになりました。そしてこう、たとえ話をういて言って聞かせてあげました。「サタンが、サタンを追い出すのですか。どうやってそんなことをするのでしょうか。一つの国が内輪もめで割れたら、その国はもう立ち行かなくなるでしょう。一つの家でも、内輪もめをしたら、立ち行かなくなります。サタンがサタンと内輪もめを起こしているのですか。そうだとしたら、サタンは立ち行かないでしょう。ただ滅びるばかりです。」

それからまたイエス様は、周りにいる「岩男」とか「雷兄弟」たちを見回しながら、こうも言いました。「腕っぷしの強い人がいる家に乗り込んで、その家財道具を略奪しようとするなら、まず、その強い人を縛り上げなければ無理でしょうね。こういう強面（コワモテ）の連中を縛り上げれば、その家のものだって奪い去れるでしょう。」

そしてイエス様はこう言われるのです。「アメン！あなた方に言うておきます。人というものは、どんなことでもゆるされるものです。どんなひどいことをしても、神を呪っても、大丈夫。神様がそれを吹き飛ばしてくださいます。でも、吹いてきた神様の息吹を馬鹿にするようなことをしてはいけません。そんなことをしたら、いつまでもひどいことが付きまといてしまいます。」これはつまり、「あれは汚い憑き物に取り憑かれているんだ」という声が世間に聞こえてきたので、イエス様はこんなことをおっしゃったのでした。

さて、イエス様のお母様とご家族が到着しました。イエス様のいる家は人でいっぱいになっています。それで、人に頼んでイエス様を呼び出すことにしました。イエス様の周りにはたくさんの人が座っていました。その人たちは、外でイエス様を呼んでいるのに気づき、「お母様とご家族がお越しのようです。先生をお探しのようですよ」と言いますと、イエスさまは「それは、誰のこと

でしょう」と、謎をかけるようなことでお答えになります。みんなが不思議そうな顔をするので、イエス様はこう続けました。「さあ、お互いをよく見てごらんなさい。私の母、私の家族だ。神様の願いを聞いてその通りしようとする人（つまり、神様の息吹を馬鹿にすることの真逆をしようとする人）。あなたこそ、私の弟だ。あなたこそ、私の妹だ。あなたこそ、私の母だ！」

イエス様の家族と、そうでない人がいる。そこにはどんな違いがあるのでしょうか。

それを考えると、また、イエス様が海辺で教えはじめたときのことを思い出します。そういう時はいつも、イエス様の周りに群衆が押し寄せましたので、ある時イエス様は船に乗り、海の中から陸にいる群衆に向かって、たとえ話をいろいろ使って話し始めました。例えばこんな感じです。

「よく、聴いて下さい。種まく人がいました。その人が種をまきに出かけます。種をまいていると、道端に落ちた種を鳥が食べてしまいました。石地に落ちた種は、土も深くないのですぐに芽を出したのですが、太陽に焼かれてしまうと、根もないので枯れました。いばらの中に落ちた種もありました。いばらが伸びるので、窒息して実を結びませんでした。それ以外の種はみんな、良い土地に落ちました。それは伸び、成長し、実を結びます。結果、種まく人は30倍、60倍、100倍の実りを得たのでした。」そう話してから、イエス様はこう付け加えました。「聞く耳を持つ人は、さあ、聞きなさい！」

群衆のいないとき、12人の弟子のまわりにいた人たちが、このたとえ話の意味を、質問しました。イエス様はその質問に答えて、こうおっしゃいました。「あなたたちには、神の秘密が与えられています。ごらんなさい、あの群衆には、すべてがたとえ話で与えられます。でも、あの群衆については、旧約聖書に

眺めているが

見えていない。

聞いてはいるが、

理解しない。

それは 彼らが立ち帰って

ゆるされることのないためだ

と、書いてある通りのことが、起きているのです。」

そしてイエス様はこう語りました。「あのたとえ話の意味が、理解できないのですか。この世界がたくさんのことを語るものですから、それを用いたたとえ話が、まだまだたくさんあるのですよ。さあ、あのたとえ話の意味を教えましょう。

種まく人がまいているものは何でしょう。それはつまり、言葉です。

道端というのは何でしょう。それはつまり、言葉が届き、それを聞いてはいるものの、すぐに疑う声が聞こえてきて、せっかく届いた言葉が消えてしまう人のことです。

石地というのは何でしょう。それはつまり、言葉が届き、すぐにそれを喜んで受け入れるのは良いのですが、自分の中に根を持たないものですから、すぐに心変わりをしてしまう。特に、その言葉のせいで不都合が起こると、すぐ躓いてしまう。そんな人たちのことなのです。

いばらの中とは何でしょう。それはつまり、言葉が届いたときに、世間的な気遣いに心乱され、あるいは豊かになりたいという思いが強く、あれこれの欲望が沸き上がってしまう人のことです。そういう人の中では、せっかく届いた言葉も窒息して実を結ばないのです。

では、よい土地とは、何のことでしょう。それはつまり、言葉を聞き、受け入れる人たちのことです。その人たちによって、届けられる言葉は30倍にも、60倍にも100倍にも、実をどっさり結ぶのです。」

あるいは、イエス様はこんなことも言いました。「ろうそくに火を灯して、升やベッドの下に入れるバカはいないでしょう。そう、火のついたろうそくは燭台の上に置きます。隠されたものは、そもそも現わされるために隠されています。隠されたものはすべて明るみに出されるのです。さあ、聞く耳のある人よ、聞きなさい！」

あるいはこのようにもイエス様はおっしゃいました。「さあ、聞いているあなた方は、注意しなければいけません。あなた方が量る、その秤で、あなた方

自身も量られることになりますよ。他の人々と自分が違うと思うなら、なお一層、厳しく量られることでしょう。そして、持っている人には与えられ、持たない人からは、その持っているものすら、取り去られる。それが世の常なのです。」

あるいはこんなことも、イエス様はおっしゃいました。「神様の力が及ぶとき、それは、人が種をまいた後に似ています。夜昼と、人は寝たり起きたりしているばかりですが、知らぬ間に芽は出て伸びています。結局、実を結ばせるのは大地なのです。まず青草が、それから穂が、そして穂の中に実が満ちていきます。穀物が自ら首を垂れたなら、すぐに刈り入れです。収穫の時なのです！」

あるいはこんな風にも、イエス様はおっしゃいました。「神様の力は、どんなふう to 現れるのか。どんなたとえ話が良いだろう…からしだねはどうだろう。地にまかれたときは、ほかのどんな種よりも小さな種です。でも、まかれると成長する。からしだねは、どんな野菜も追い越して、大きくなります。気が付けば大きな枝を張って、空の鳥がその陰に宿るほどになるのです。」

イエス様は、こんな風に、だれにでも、その人に合わせて言葉を語りました。必ず何かに例えて、お話になりました。そして、群衆がいなくなると、弟子たちに、一つ一つ解説してくださったのでした。

* * *

夕方になりました。イエス様は「向こう岸に渡ろう」と言いました。みんなを残して、イエス様を乗せた船は、幾艘かの船と一緒にガリラヤの大きな湖に漕ぎ出して行きました。それはまるで、今の私たちの教会のようです。すると嵐になりました。荒々しい風。悪魔が行き来するような恐ろしさです。波も荒れ、水はイエス様の乗っている船の中へ、どんどん入ってきました。イエス様は、たとえば、一番水が入ってくる場所、船の艫（船尾）で、寝ています。しかも、布をまとめて枕にして！それで、弟子たちはイエス様を起こそうと、こう言いました。「先生、すべてが台無しになってしまいます！いいんですか！」すると、イエス様は目を覚ましました。そして横になったまま、風と湖を叱りつけるようにして言いました。「静かに！…落ち着け。」すると、どうでしょう。風はおとなしくなりました。どこまでも、静かな湖となりました。イエス様は弟子たちに言いました。「なぜ、恐ろしく思いますか。まだ、頼りに思っ

れないのですか。」弟子たちは、なんだかとても、恐ろしく思いました。そして、互いに顔を見合わせながら、心の中で、あるいは小さな声で、こう言いました。「この人は一体……。風も湖も、言うことを聞いたぞ……。」

そして向こう岸に着きました。そこはゲラサ人の地方でした。ゲラサ人というのはローマ帝国の人々が移住してきて建てた大きなギリシア風の「10 大都市（デカポリス）」の一つに住む人々で、その都市部はここから 60 キロも離れたところにありました。そういう遠いところの人々が、この地域の地主になって支配していた。そんな場所です。イエス様が船を降りますと、すぐ、一人の男と出会いました。墓場から出てきた男で、けがれた霊にまとりつかれていました。墓場に住むこの男は、鎖につながれていたのですが、結局それを引きちぎってしまうのです。足枷と鎖は全く役にも立たず、だれも彼を押さえつけることができません。そして、この男は夜も昼も墓場や山中にいて、叫び声をあげ、石を取って自分の体を傷つけていました。そんな彼が、遠くからイエス様を見つけたのです。それで走ってきて、くずおれて土下座し、そしてこう、イエス様に頼んだのでした。「俺と、あんたと、何だっていうんだ。あんたは、イエスだろ、天の高いところにいる神様の子だ。神様にかけて……。お願いだ。ひどいこと、しないでくれ。」イエス様はこう言っていたのです。「けがれた霊、この人から、出ていけ！」

さて、イエス様はこの男に向かって尋ねました。「名前は何だ？」この男が答えて言うには「レギオン！それが俺の名だ。俺たちは、いっぱいいるぞ！」。この「レギオン」というのは、ものすごい数で編成されるローマ軍の部隊の呼び名でした。イナゴの大群のように、あふれるように地平線の向こうから現れて、あらゆるものを破壊する軍団。その恐ろしい力が、この男にまとりついて離れないのです。この「レギオン」が、無数の声で、口々に哀願します。「ここから追い出さないでくれ！頼む！頼む！お願いだ！お願いだ！」ふと見ると、湖のそばに山があり、そこにはたくさんの豚が放牧されていました。イエス様たちユダヤの文化では、近づくことも許されない、穢れた動物たちです。つまり、ここはギリシア・ローマ系の人々が支配する土地だったのです。「レギオン」はイエス様に頼んでこう言いました。「そうだ、あの豚だ。あれがいい。そこに移るようにしてくれ。それなら、いいだろう？！」イエス様は、それもいいだろうと思いました。すると、けがれた霊は男から出て、豚に入りました。豚は群れをなして走り出し、崖の上へ駆け上ると、そのまま海へ落ちていったのでした。その数およそ 2000 頭。みんな、溺れて死にました。

豚を飼っていた人々も逃げ出しました。「けがれた動物」が突然、恐ろしい勢いで異常な行動をとったのを、間近に見たのです。大変なことが起こった、と、逃げて行く先々で、畑でも町でも、このことが語り伝えられました。それで、人々は寄り合い、何が起こったのかを確かめにやってきました。すると、問題の場所にはイエス様がいて、そしてそのそばに、あの男がいました。悪魔に憑りつかれていたはずの、あの男です。でも、その人はきちんと服を着て、正気になって、座っています。この人こそ、確かに、あの「レギオン」にまわりつかれていたはずの、あの男です。やってきた人々はみんな、恐ろしく思いました。事の次第を見ていた人々は、そこで、この人こそ悪霊に憑かれていた男だったこと、そして、豚に何が起こったのか、と、説明をし始めました。それを聞いて、人々は「ここから出て行っていただけないでしょうか」と、イエス様に、やんわりと、頼み始めました。

それでイエス様がまた船に乗りますと、あの悪霊から解放された人が「一緒に、行かせてください」と言いました。イエス様は、それを許しませんでした。こうおっしゃったのです。「家に帰りなさい。待っている人がいるでしょう。さあ、聖書の神様が、いったいどんなことをしてくださったのか、あなたが頂いた恵みを、みんなに教えてあげなさい。」それでこの人はイエス様の許を離れ、遠く離れたデカポリスに帰っていきました。この人を手余した家族も友人も、彼を見捨てて、この遠くの場所に追いやり、今日まで過ごしてきたのです。でも、彼は帰っていきました。そしてイエス様が何をしてくれたのか、みんなに語って聞かせました。それを聞いた人々はみんな、本当にびっくりしたことでした。



